

下 原 遺 跡

県営圃場整備事業野津原西部地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

野津原町教育委員会

しも ばる
下 原 遺 跡

県営圃場整備事業野津原西部地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

野津原町教育委員会

例 言

- 1 本書は、県営岡崎整備事業野津原西部地区の実施に伴い調査を行った下原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大分県大分地方振興局耕地課の委託により野津原町教育委員会が実施したものである。発掘調査を平成10年度に、また整理作業を平成14年度に各々実施した。
- 3 発掘調査の実施と本書の作成にあたり、大分県教育委員会文化課の協力を得た。
- 4 遺構の実測は調査員が行い、トレースに大分県文化課文化財資料室整理作業員の助力を得た。また、遺物の実測・トレース・観察表作成については、株式会社九州文化財リサーチに委託した。
- 5 遺構の写真撮影は、調査員が行い、遺構空中写真は株式会社スカイサーベイに、また遺物写真は株式会社九州文化財リサーチに各々委託した。
- 6 遺構図面及び遺物については、野津原町教育委員会で保管している。
- 7 本書に使用する方位はすべて磁北である。
- 8 本書の執筆と編集は、大分県教育委員会文化課高橋徹、後藤一重氏の指導による。

目 次

第1章	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査団の構成	1
第2章	歴史的環境	2
第3章	調査の成果	2
1	縄文時代	7
2	弥生・古墳時代	8
3	歴史時代	18
第4章	まとめ	20

第1章 はじめに

1 調査にいたる経過

下原遺跡は大分県大分郡野津原町大字下原字原村に位置する。

遺跡は、標高約125mの七瀬川左岸の河岸段丘上に立地するもので、七瀬川河床との比高差は約15mである。東向きの緩斜面の当遺跡周辺は、遺跡立地の好条件を備えていたと思われ、縄文時代から歴史時代にいたるいくつかの遺跡が確認されている。

当地区が県営岡崎整備事業野津原西部地区の予定地として、大分県農政部から大分県教育委員会文化課に協議があったのは平成8年度であった。これを受け、県文化課は事前の分布調査を行った。その結果、当地区は地形的に遺跡の存在する可能性が高いことから、試掘調査が必要と判断された。試掘調査は、平成10年1月26日～1月30日の間に、切り土部分を中心に大分県教育委員会が実施した。試掘対象面積は約70,000㎡で、一部において弥生・古墳時代などの遺構が確認された。遺構が検出された地区の取り扱いについては、大分県大分地方振興局耕地課、大分県文化課、野津原町教育委員会の三者で協議を行った。しかし、1,300㎡余は工法変更等の保存措置が困難なことから、この部分について本調査を実施することになった。

本調査は、野津原町教育委員会が主体となり、平成10年8月24日～10月15日の間に実施した。調査面積は1,361㎡で、弥生・古墳時代の堅穴などが確認された。

整理作業は平成14年度に実施した。このうち遺物の実測・トレース・写真撮影については、株式会社九州文化財リサーチに委託した。

2 調査団の構成

調査主体 野津原町教育委員会

調査員

調査担当 原 田 昭 一 (大分県教育委員会文化課主査：平成10年度)

若 杉 竜 太 (大分県教育委員会文化課嘱託：平成10年度)



第1図 下原遺跡位置図

第2章 歴史的環境

大分県のはば中央部に位置する野津原町は、県都大分市の南西部に位置する。町内には大分川の支流である七瀬川が流れ、起伏にとんだ地形をなす。まとまった平野部は少なく、七瀬川沿いに形成される小規模な段丘がわずかな平地面を作り出す。大分市と大野町の境界である町の東方には標高700m余の雲山山系が連なる。また、直人町との境界である町の西方には片川が流れ、深い峡谷が形成されている。さらに、町の南西部の今市地区には厚い火山灰の堆積がみられる広大な台地が展開する。以上のように、町内には多様な地形がみられ、複雑な様相を呈する。

野津原町内では、七瀬川沿いなどに点々と遺跡が確認されている。しかし、本格的に発掘調査が実施されたものは少なく、昭和40年前後に2回にわたり調査された黒山遺跡以降は長らく調査の機会に恵まれなかった。近年にいたり、平成8年度には大分川ダム工事用道路建設に伴い縄文時代の下原遺跡が、また平成9年度には新行倉建設に伴う町家遺跡の調査が行われた。このように、わずかではあるが町内の遺跡の詳細な状況が明らかにされつつあり、野津原町の歴史叙述を行ううえに大きな手がかりになるであろう。以下、少ない資料ではあるが、各時代の状況を概観する。

旧石器時代の良好な遺跡は確認されていない。しかし、石倉原北遺跡で表層された流紋岩製の石器は、旧石器時代の石器である可能性が高い。今後、七瀬川沿いの段丘上や町西方の火山灰台地上で遺跡が確認されることが考えられる。

縄文時代では、七瀬川沿いの段丘上に遺跡が点在する。黒山遺跡は、標高130mを測る七瀬川沿いの台地上に位置する。昭和39年に古代学協会により、また昭和42年には大分県教育委員会により調査が実施された。時期的には、早期から前期に比定される。遺物のうち土器は、早期の押型土器、塞ノ神式土器、前期の曲B式土器などが検出された。押型土器は早水台式土器や手向山式土器がみられ、早水台式土器に伴うと思われる無文土器も多数確認された。石倉原北遺跡は、七瀬川上流の標高約480mの台地上に位置するもので、昭和46年に行われた草地改良事業中に遺物が確認された。土器は早期の押型文を中心とするものである。押型土器には、山形文を主体とする幅首山式や早水台式、粗大な横円文が施文される田村式などがみられる。下原遺跡は、大分川ダム工事用道路建設に伴い平成8年に調査された。遺跡からは、後期初頭から前葉に比定される多量の遺物が検出された。これら遺物に伴い竈穴や石組竈などが確認されたが、SX1は住居跡の可能性が考えられるものである。規模は長辺4m、短辺2.4m、深さ0.35mを測るもので、平面形が半楕円状を呈する。しかし、床面から柱穴や炉跡は検出されていない。石組は川原石を花弁状に配したもので、単独に検出された。本遺構が、住居内の施設であるのか、屋外竈であるのかは判断できていない。本遺跡の土器は、東九州における当該期の標準的な資料となるものであろう。このほか、町家遺跡、黒山遺跡、黒山遺跡、岡遺跡、塩手野遺跡、聖観寺遺跡、長野遺跡が七瀬川沿いの段丘上にみられる。しかし、これらの遺跡については、時期などの詳細なデータが明らかでない。

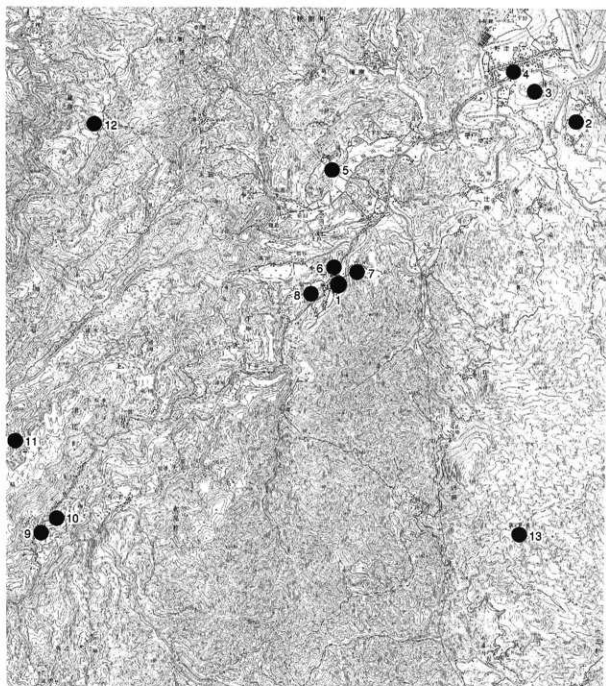
弥生時代の遺跡については、町家遺跡、黒山遺跡、黒山遺跡、岡遺跡、塩手野遺跡、聖観寺遺跡、長野遺跡などで確認されている。このうち、町家遺跡からは板付Ⅱb式に比定される大型の竈などが検出されている。野津原町内でも、早くから弥生時代の集落が営まれていたことが分かる。このほか、黒山遺跡では弥生から古墳時代の所産と考えられる石棺が確認されている。

古墳時代から中世にいたる間については、調査例もなく詳細は不明である。今後の調査に期待したい。

近世については、町家遺跡で調査が行われている。近世の野津原町は野津原宿として栄えており、調査では宿場町の一角に調査区を設定したことになる。調査区は小字名からも分かるように、町屋街の奥手にあたるもので、街道に面しない部分の状況が明らかになった。

第3章 調査の成果

本調査は、工法変更等の保存措置がとれなかった部分について実施した。調査区はL字状を呈し、その面積は1,364㎡を測る。調査区内にはほぼ全面で遺構を確認することができ、竈穴、土壌、柱穴などを検出した。竈穴は6基で、弥生時代末から古墳時代初期にかけてのものである。いずれも平面プラン方形を呈し、一部は柱礎する。また、柱穴については、調査区内から中世の遺物が検出されることから、その大半は中世のものと考えられる。



- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 下原遺跡 (縄文、弥生、古墳) | 8 塩手野遺跡 (縄文、弥生) |
| 2 黒山遺跡 (縄文、弥生) | 9 石倉第1遺跡 (縄文、弥生) |
| 3 寛々城跡 (中世) | 10 石倉第2遺跡 (縄文、弥生) |
| 4 町家遺跡 (弥生、近世) | 11 今市遺跡 (縄文、弥生) |
| 5 岡遺跡 (縄文、弥生) | 12 燕鳥宮城跡 (中世) |
| 6 聖観寺遺跡 (縄文、弥生) | 13 田村城跡 (中世) |
| 7 長野遺跡 (縄文、弥生) | |

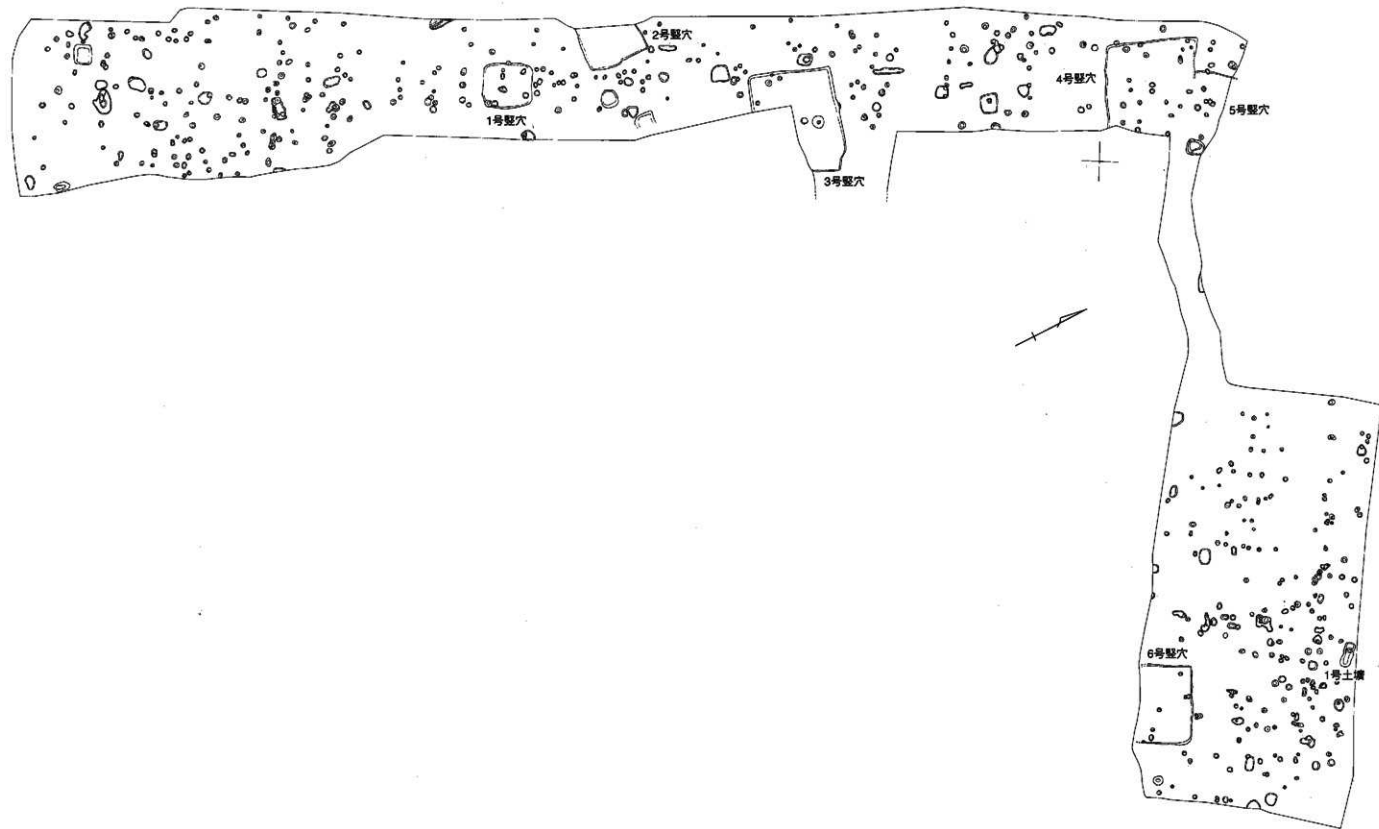
第2図 下原遺跡と周辺の遺跡

調査区

平成8年度調査区

0 100m

第3図 下原遺跡調査区と周辺の地形



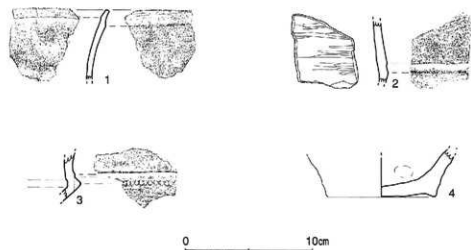
第4図 下原遺跡遺構配置図

1 縄文時代

縄文時代の遺物は、遺構検出時などに散発的に検出された。本来、当該期の遺構や包含層が存在したものと推定されるが、調査区内では確認することができなかった。本遺跡の位置する七瀬川流域では、段丘上に縄文時代の遺跡が点在する。遺跡東方の七瀬川沿いでも、縄文時代後期初頭から前期の良好な遺跡が調査されている。

検出された土器はそれほど多くなく、そのうち器形や時期の分かるものは数点である（第5図）。1は深鉢の口縁部である。土器成形の際、口縁部付近で粘土紐を継ぎ足しわずかに外反させることから、外面口縁下に突帯が付されたようにみえる。また、口縁内面には段を有する。調整は内外面ともヨコナデで、外面にはヘラミガキがみられる。東九州において、このような器形は沿岸部を中心にみることができる。沿岸部では体部の調整に条痕が施される場合が多く、ナデやミガキで仕上げられるものは少ない。時期は晩期初めに比定される。2は、屈曲する体部中程から口縁にむかい立ち上がる部分で、外面に軽い段がみられる。時間的には、後期末から晩期初めに位置付けられよう。3は浅鉢で、屈曲部に刻みが施される。刻目突帯文出現する下黒野式の範疇で捉えられよう。4は底部で、後期前半のものか。

石器は石鏃が2点検出された（第6図）。5は安山岩製で、大きな袈りをもつ。片方の脚が一部欠損する。現状で長さ2cm、巾1.5cm、重さ0.3gである。6は姫島産黒曜石製の小型品である。先端部をわずかに欠くが、現状で長さ1.1cm、巾1.3cm、重さ0.2gを測る。



第5図 下原遺跡出土縄文土器



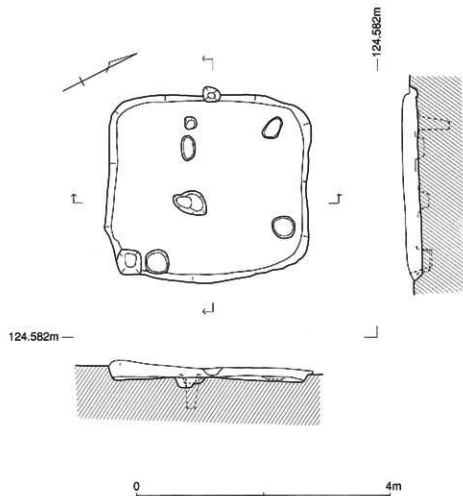
第6図 下原遺跡出土石器

2 弥生・古墳時代

弥生・古墳時代に位置付けられるものとして、堅穴が6基検出された。

(1) 1号堅穴

1号堅穴（第7図）は、調査区西側の中央部に位置する。本遺跡で確認された堅穴のなかでは、最も小型である。縦横は長辺3.2m、短辺3.0mを測り、平面プランはほぼ方形を呈する。堅穴の深さは0.1~0.2mで、床面は中央部付近がわずかに盛り上がり気味である。堅穴内には柱穴がいくつかみられるが、主柱穴と思われる柱穴は



第7図 下原遺跡1号堅穴



第8図 下原遺跡1号堅穴出土土器

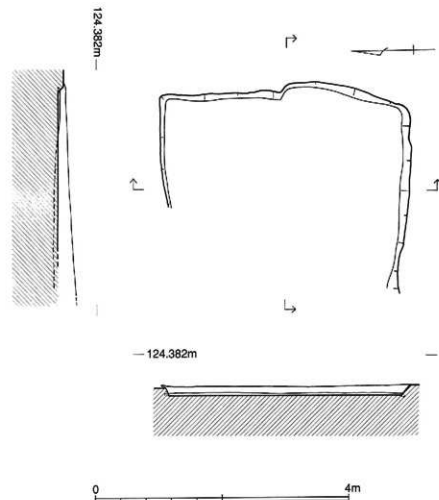
1本のみである。他の柱穴についてはいずれも浅く、木堅穴の上層を支えるものではない。主柱穴は、堅穴の西壁沿いのやや南寄りに位置する。また、加跡については検出されなかった。堅穴内の遺物は少なく、土器片などが散発的にみられた。

出土土器（第8図）のうち、7は安国寺式の二重口縁甕である。口縁端部が欠くが、口縁部の長い立ち上がりが見られる。外面は磨滅のためやや不鮮明であるが、縄縞波状文が数段にわたり全面的に施文される。時期的には、弥生時代終末から古墳時代初めに比定されよう。

(2) 2号堅穴

2号堅穴（第9図）は、調査区西側の中央部にみられる。1号堅穴の約3.5m北側に位置するが、主軸方位は大きく異なる。

堅穴は、西半が調査区外に及ぶため全形は不明であるが、平面プラン方形を呈する。規模は、全長の分かる東辺が4.0mを測る。検出面から床面までの深さは0.1~0.2mで、床面は平坦である。堅穴内の施設については、全く確認されなかった。しかし、未調査部分である堅穴西下において、主柱穴や炉跡などの遺構が検出される可能性が残る。また、堅穴内からの遺物は極めて少量で、若干の土器片が確認されたのみである。時期を判断できる良好な資料を欠くが、他の堅穴とおおむね同様な時期の所産と思われる。



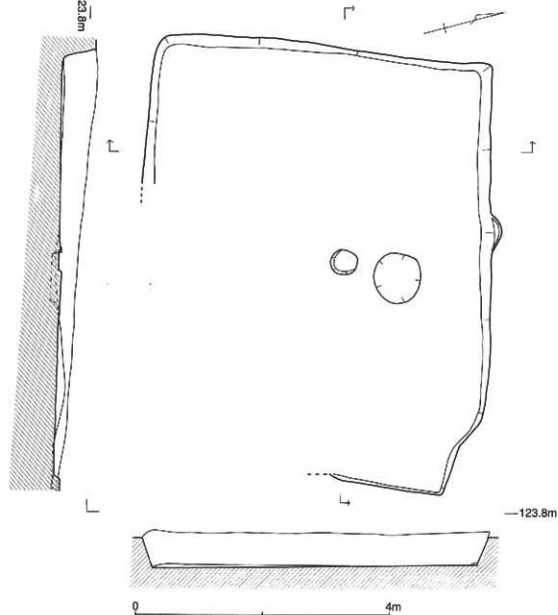
第9図 下原遺跡2号堅穴

(3) 3号竪穴

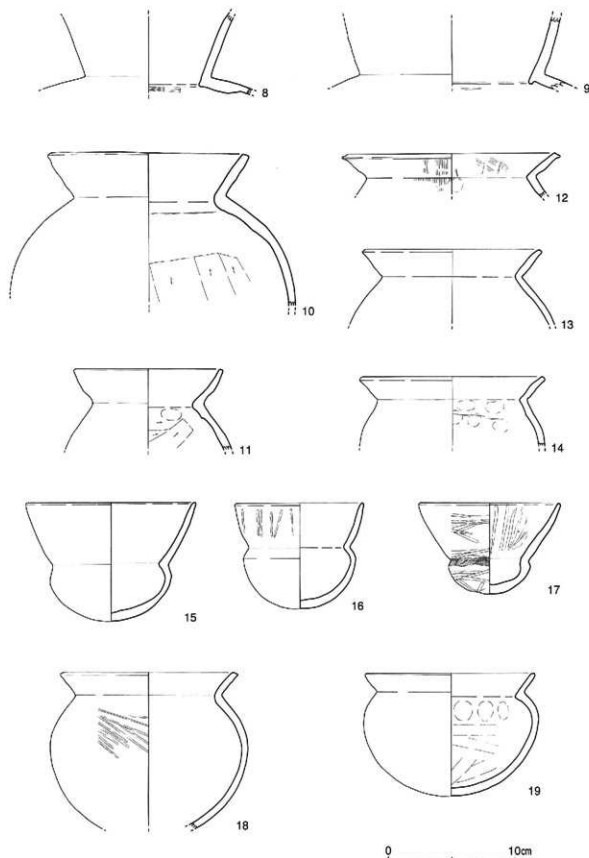
3号竪穴（第10図）は、調査区西側の中央からやや北に寄った位置にある。本竪穴の約6.5m南側には2号竪穴がみられ、主軸方位的はちかい状況にある。

竪穴は、東南部が調査区外に及ぶが、平面プラン長方形を呈することが分る。東西方向に長軸をもつもので、その規模は長辺6.8m、短辺3.3mを測る。検出面から床面までの深さは0.1~0.5mで、床面は平坦である。竪穴内の施設については、中央やや北寄りに炉跡と推定される浅い遺構がみられる。平面プラン楕円形を呈し、長径0.8m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。柱穴については、炉跡のすぐ南側に1本が認められるが、非常に浅く主柱穴とは考えにくい。調査区外に及ぶ竪穴東南部において確認される可能性が残るものの、本竪穴規模では通常4本柱の主柱穴をもつ場合が多いことを考えると、主柱穴については問題が残る。

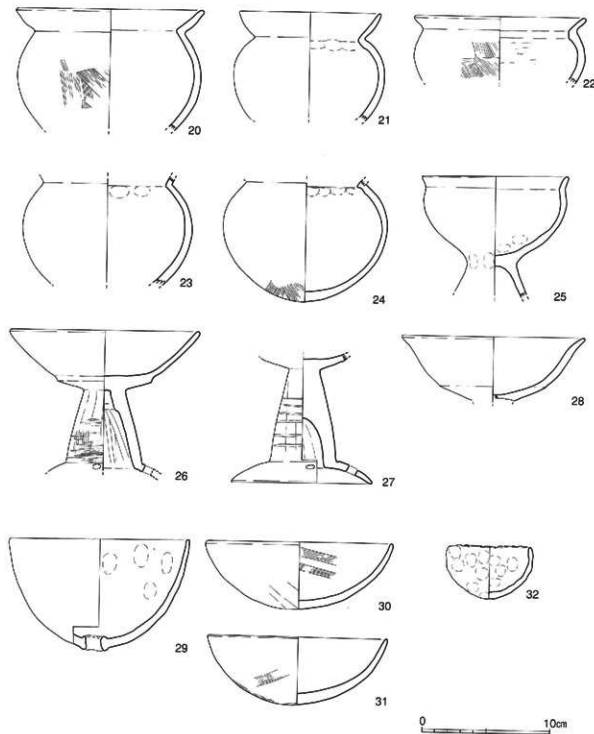
竪穴内からは、土器を中心に多くの遺物が検出された。特に、竪穴北東部床面ちかくにおいて集中的に確認された。なかには完形品にちかひものもあり、良好な一括資料となろう。



第10図 下原遺跡3号竪穴



第11図 下原遺跡3号竪穴出土土器 (1)



第12図 下原遺跡3号壱穴出土土器(2)

出土土器(第11、12図)のうち、8、9は長頸甕である。8は口縁部を欠くが、頸部から直線的に口縁にむかい伸びる。9も口縁部を欠くものであるが、頸部からやや内湾気味にのびる。

10~14は甕である。10は球状の体部をもつもので、内面に縦方向のヘラズリが施される。11は小型甕で、口縁部が内湾気味である。体部内面には、10と同じようにヘラズリがみられる。12~14は口縁部がくの字状に折れるもので、体部内面はいずれもヘラズリが認められない。12は口縁端部が平坦であるが、端部を外方にわずかに引き出し気味である。外面及び口縁内面にはハケメが施される。13、14は調整にハケメがみられず、ナデに

より仕上げられる。

15~17は小型丸底甕である。15は、扁球形の体部から口縁にむかいわずかに内湾気味にのびる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデにより仕上げられる。16は口径と体部最大径がほぼ等しいものである。体部は球形にちかく、外面はナデによりいかに仕上げられる。口縁部外面にはヨコナデの後腹方向のヘラミガキが施されるが、極めて粗である。17は体部の矮小化が著しいもので、体部最大径が口径の半分ちかくなる。外面は頸部にハケメが残るが、体部と口縁部はナデの後にヘラミガキが施される。内面は、口縁部に縦方向のヘラミガキが施され、体部は指などによるナデで仕上げられている。

18~24、29~32は鉢である。18~24はいずれも丸底を呈し、口縁部はくの字状に短く折れる。体部は球形のもの(18、20、21、23、24)と、やや扁球形のもの(19、22)がある。体部の調整はナデによるものが多いが、20、22、24の外面にはハケメが施される。また、17の外面には斜方向の粗いヘラミガキがみられる。体部内面については、22に横方向の軽いヘラズリが施される。29は砲弾状の器形を呈し、底部に焼成前の穿孔がみられる。30、31は、口径に比し器高の低いものである。浅い碗状の器形を呈するもので、底部は丸底である。32は手捏ねの小型品である。

25は脚付き鉢である。鉢部の体部は半球形で、口縁部が短く外方に折れる。脚は比較的高いもので、ハの字状に開く。

26~28は高坏である。26は水平化した坏底部から、口縁部にむかい斜方向に直線的にのびる。脚部は、ハの字状に開く脚柱部から、明確な稜をもち内湾気味の裾部が開く。27は坏部の大半を欠くが、脚は26と同様な形態である。28は坏部である。坏底部は水平にならず、緩やかな稜をもち口縁部にむかいのびる。口縁部はわずかに外反気味である。

以上は、布留式並行の古墳時代前期に位置付けられる。

(4) 4号、5号壱穴

4号、5号壱穴(第13図)は、調査区西北隅に位置する。両壱穴とも、調査区外に及んだり削平のため全容は不明である。両者は重複関係にあるが、その前後関係は明確ではない。壱穴の平面プランは、両壱穴とも方形ないし長方形を呈すると思われる。

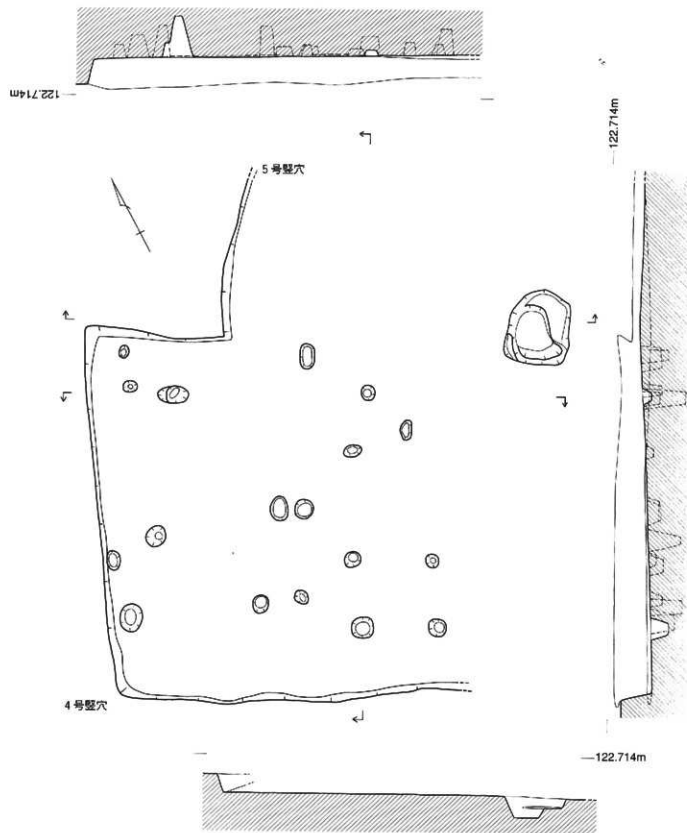
このうち4号壱穴の規模は、全長の分る西辺で短辺5.8mを測る。検出面から床面までの深さは0.2~0.4mで、床面はほぼ平坦である。壱穴内からは多数の柱穴が検出されたが、深さにばらつきがあり、位置的にもまともがみられない。そのため、主柱穴配置については明確にしない。また、炉跡については確認されていない。出土遺物は、土器を中心に床面ちかくからいくつか検出されている。

一方、5号壱穴の規模については不明で、主柱穴配置も4号壱穴と同様に明らかではない。遺物についても土器片が散発的に確認されたのみで、図示できるようなものはなかった。

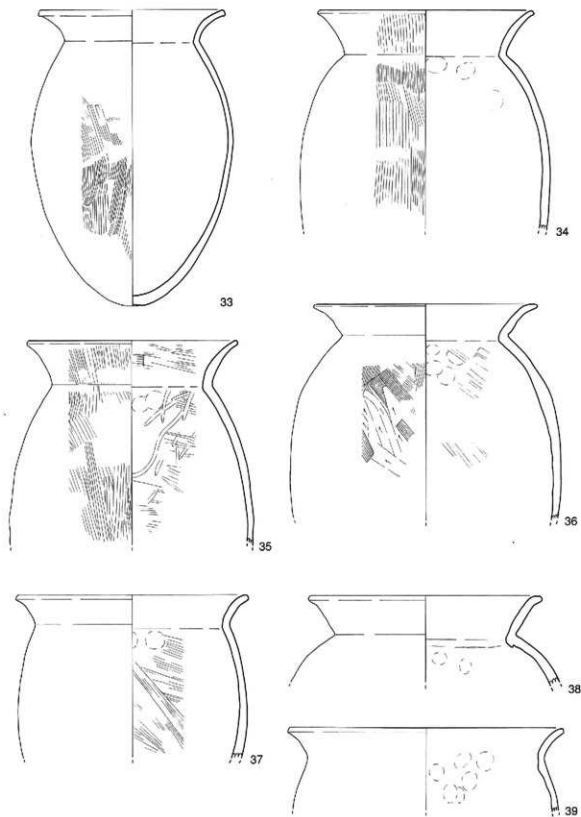
4号壱穴出土土器(第14、15図)のうち、33~39は甕である。33は全形を知らず得る資料で、最大径が体部にある。体部は長頸を呈し、なで肩状をなす。底部はわずかに平底が残るもので、底部はやや凹み気味である。口縁部は頸部から外反気味に折れる。体部外面にはハケメが施される。34~36は33と同様な器形を呈するものであるが、調整は各々異なる。34は口縁部から体部にいたる外面に、縦方向のハケメが施される。35はやはり外面に縦方向のハケメがみられ、内面にはハケメに加えミガキ状のものが一部に施される。36は外面にハケメと板ナデが、また内面には部分的にハケメがみられる。37、39は口径と体部最大径がほぼ等しいもので、口縁部は頸部から緩やかに折れる。38は口縁端部がわずかに折れ気味で、肩部が堅る。

40は脚付き鉢で、口縁端部が短くわずかに外傾する。外面全体及び内面の一部に赤色顔料の塗布が認められる。

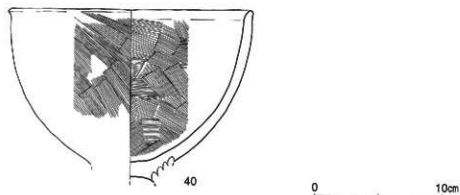
以上の時期は、弥生時代後期末に比定される。



第13图 下原遺跡4号、5号壁穴



第14图 下原遺跡4号壁穴出土土器 (1)



第15図 下原遺跡4号竪穴出土土器 (2)

(5) 6号竪穴

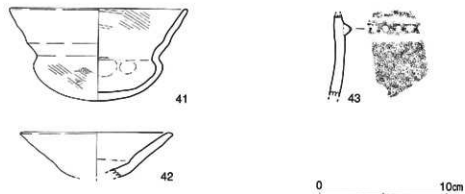
6号竪穴(第17図)は、調査区北東隅に位置する。1号～5号竪穴が比較的近接した場所にみられるのに対し、6号竪穴のみやや離れて位置する。

竪穴の平面プランは方形を呈するものと思われるが、南半が調査区外に及ぶため全形は不明である。規模は、全長の分かる北辺で短辺5.1mを測る。検出面から床面までの深さは0.1～0.3mで、床面はほぼ平坦である。竪穴内には柱穴がいくつかみられるが、いずれも深さ0.2mほどの浅いものである。南半の状況が未調査で不明なこともあるが、現状において主柱穴配置は不明である。炉跡は竪穴中央部にみられる。床面に焼土と炭化物が広がる地床炉で、その規模は径約1mで円形を呈する。竪穴内から検出された遺物は少なく、土器片が散発的に確認されたのみである。

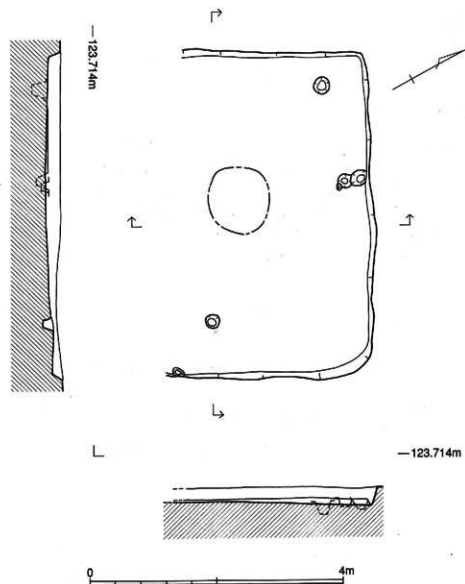
6号竪穴から検出された土器のうち、図示できたものは少ない(第16図)。

41は小型丸底甕である。体部は扁球形を呈し、頸部から長い口縁部が直線的に開く。頸部上部には、ヨコナデを施す際に生じたと思われる凹凸がみられる。外面の調整はヨコナデとナデであるが、体部の一部にハケメが残る。内面は口縁部内側にハケメがみられるが、他はヨコナデとナデで仕上げられる。42は鉢と思われる。小型品で、小型丸底甕を模倣したような形状をなす。以上は、古墳時代前期に比定される。

43は、本竪穴には伴わない混ざり込みの遺物と思われる。外面口縁下に刻目突帯文を付す下城式である。弥生時代前期末から中前期のものか。



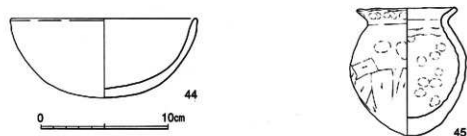
第16図 下原遺跡6号竪穴出土土器



第17図 下原遺跡6号竪穴

(6) その他の土器

44は鉢である。口径に比し器高の低いもので、浅い碗状を呈する。底部は丸底で、内湾気味に口縁部にいたる。45は小型の甕である。口縁はくの字状に折れ、底部は丸底を呈する。体部下半には、板状工具によるナデがみられる。



第18図 下原遺跡 弥生・古墳時代その他の出土土器

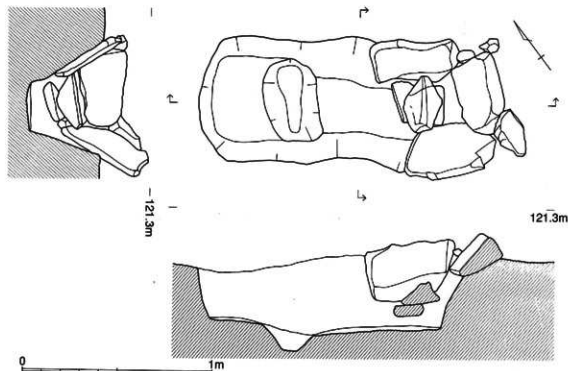
3 歴史時代

歴史時代の遺構と思われるものとして、土壌や柱穴などが検出された。柱穴は圓柱建物を構成するものと推定されるが、建物の明確な復元にはいたらなかった。

(1) 1号土壌

1号土壌(第19図)は、調査区の北東隅に位置する。東西方向に長軸をもつもので、長さ1.5m、巾0.65m、深さは0.25~0.4mを測る長方形を呈する。西端で、板状の石材をコの字状に組んだ状況が確認された。石槽を思わせる構造であるが、各石材の下部が底面まで達しておらず、小口に相当する部分の石材は肩部に引っ掛かったような状態である。弥生・古墳時代の石棺における石組みとは、明らかに異なる。土壌内から瓦質の襷鉢が検出されており、時期的には中世に位置付けられる。

土壌から検出された土器(第20図)は、46の瓦質土器襷鉢である。14~15世紀の所産であろう。



第19図 下原遺跡1号土壌

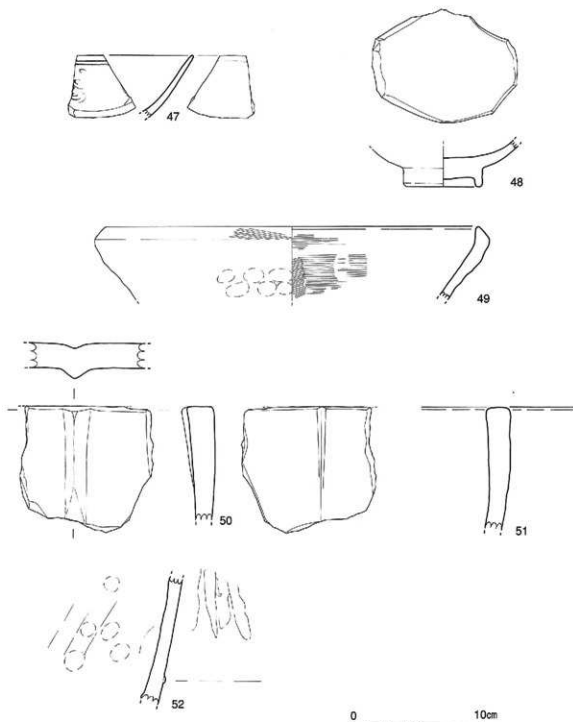


第20図 下原遺跡1号土壌出土土器

(2) その他の中世土器

遺構などに伴わずに検出された土器を紹介する。

47、48は青磁碗である。47は横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗14類に当たり(横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館論集』4 1978)、12世紀後半に比定される。48は底部である。49は瓦質土器こね鉢で、口縁部端部が上方に拡張される。内面にはハケメがみられる。50~52は瓦質土器火鉢である。いずれも大型のもので、50は輪花状を呈するものか。これら火鉢は、15、16世紀に比定されよう。



第21図 下原遺跡出土中世土器

第4章 まとめ

I 下原遺跡の変遷

下原遺跡では、6基の堅穴と多くの小ピット、土壌1基が調査された。遺跡としての変遷は以下のようになる。なお、本稿で言及する土器の時期比定については、後述する高橋の最晩土器編年^{註1)}に拠っている。

I 段階： 縄文時代後期末から晩期前半。明確な遺構は検出されていないが、当該期の土器片が很少数確認されており、小規模ながらこの時期に生活の場としての利用が始まったようである。しかしこれに続く時期の資料を欠いており、継続的ではなく一時的なものである。

II 段階： 弥生時代早期。大分平野周辺で弥生時代早期に位置づけられている、下黒野式に比定される浅鉢の土器が出土している。量も少なく他の出土品も確認されておらず、これもまた一過性の現象と考えてよい。

III 段階： 古墳初期。数件の堅穴住居で構成される。居住地が形成される段階である。1号堅穴及び4号堅穴が該当する。1号堅穴は1辺3m程の方形プランを有する小型堅穴で、出土の上層片は、口縁部が伸びた安国寺式系統の複合口縁壺で、最晩土器編年に照らしてみると、弥生VI期（弥生終末）というより、後続する古墳I期（古墳初頭）に位置づけられ方がよいものである。4号堅穴は1辺4m弱の、おそらく正方形に近い平面プランを呈する堅穴住居跡で、この時代の標準的な規模のものである。出土した土器の殆どは胴長の甕で、全形のわかる14箇33から判断しても、底部はほぼ丸底に復元されるものと思われる。口縁部の最大径が、卵形の胴部最大径より、やや小さい点も、これらの土器が弥生終末に後続する古墳I期（古墳初頭）のものと考えてよい根拠となる。

IV 段階： 古墳前期前期。3号堅穴及び6号堅穴が当期に属する。3号も正方形に近い平面プランを持つ、床面積34㎡程の中規模堅穴である。6号堅穴は1辺5m弱と、これよりも小型である。地床炉跡があり、住居としての機能を備えている。一括廃棄されたと推測される土器群が出土している。その内容は甕、壺、小型丸底甕、高坏、甕、鉢、手捏土器で、当該期の器種が揃っている。6号堅穴出土の土器共々、最晩土器編年古墳II期に比定されよう。このように、古墳時代になって成立した居住地は古墳前期前期を過ぎると廃され、再びこの地が利用されるようになるのは、中世である。

V 段階： 中世。中世の建物としては、12世紀及び14世紀～16世紀のものがある。瓦質の播磨鉢や、こね鉢、火鉢等日常の生活道具が出土しており、無数の小ピット群の存在とも併せて考えると、小規模な中世の建物が存在していたであろう。

下原遺跡の調査は土法変更ができない、削平される部分のみで実施されたため、遺跡の全容を把握することはできなかった。しかしながらそのおおよその変遷は推測することができたのではなかろうか。すなわち、見てきたように、当該地は居住の場として、小規模ながら断続的に利用されている。時代の大きな替わり目毎に、新たに生活地として使われるが、その後比較的短期間で廃絶する。出土の土器や堅穴住居跡の形式から見ると、近隣の大方市南田遺跡^{註2)}や同市賀東中学校遺跡^{註3)}等を営んだ人々と同じ文化を持った集団が形成した遺跡と考えてよい。調査区周辺にはまだ、同様の遺構が現状保存されており、その取り扱いについては今後も慎重に行わなければならない。

註1)高橋徹2001『大分の弥生・古墳時代土器編年』『大分県立歴史博物館 研究紀要2』

註2)吉田寛他1998『南田遺跡』大分県教育委員会

註3)坪根伸也他1992『賀東中学校遺跡』大分県教育委員会

2 付論

弥生終末～古墳前期の最晩土器編年（高橋2001から抜粋・一部改変 第22図）

弥生時代

弥生VI期（弥生終末）

多式瓦遺跡SD06、SD03溝資料の大半はこの時期のものである。甕や壺とも、殆どの器種で丸底化が完成しているが、不安定な平底のものも混在する時期である。

壺Iは頸部に1本、胴部中央に1本の突起をめぐらす。長胴型というタイプや、胴部が膨らむタイプがあり、これらで内面を明確にへう削りしたものは見あたらない。

古墳時代

古墳I期（古墳初頭）

守岡Ⅲ式で代表される。遺跡としては浜遺跡E-O1第3土器群、守岡19号住居跡、高添遺跡山口地区29号住居跡、大飼町高松遺跡29号住居跡、野津町下藤遺跡A区17号住居跡、下藤方形周溝墓などがこれに該当する。当期になると、僅か少数の例外を除けば甕、壺とも原則、完全に丸底化している。当期から、畿内第3様式系二重口縁壺が確認されるようになる。甕は数種類存在する。甕内面の胴部下半をへう削りするものがある。これは、当期を前段階と区別する目安となる現象である。

高坏は大小2種類ある。通常の坏部を持つものと、口縁部が屈曲するものである。

古墳II期（古墳前期前期）

浜遺跡一括、小園遺跡110号、板切Ⅱ区22号住居跡、三反田遺跡1号住居跡資料をこれに充てる。広口の小型丸底甕は、口縁部が前段階にくらべてやや発達するがまだ口徑に比較して器高の低いものである。

脚付き鉢46は、大きく外反する口縁部がI期に比べて発達し、かつ直線的に変化している。高坏の坏部底面は完全に平ら化する。甕内外面はへう磨き調整。

古墳III期（古墳前期中葉）

小園114号住居跡、同119号、板切・遺跡7号、同24号住居、稲田B区1溝例を充てる。複合口縁壺は口縁部の内傾度が弱まり殆ど直立するものが目立つ。在地系長調壺は内外面ともハケ調整の後、なでを行っている。高坏は口徑が縮小する。口徑13cm台のものと15～17cm内のものに大別される。器面調整は、外面の磨きがやや粗雑化したり、平滑な撫で仕上げになったりするが、後者の例でも内面の磨きは行われるものが多い。

古墳IV期（古墳前期後葉）

久住町板切Ⅱ遺跡15,16住居跡、同23号住居例等が該当する。

描き加減状文の連くの字口縁壺はまだ存在するようである。長胴気味の球形胴部と立ち上がり急で端部が尖る外清する口縁部の壺や、直線的に外反する直口壺には、内面のへう削りが残る。小型丸底甕は退化し、調整も研磨が施されなくなる。高坏は坏部上段が直線的に開き、下段部内面が浅い形状のもの、弱いながらも外湾し、下段部内面が深いもので、いずれも口徑は18～19cm台と形式より大きめである。口縁部の外反度も大きく、坏部全体は口徑に比べて器高が低い形状となる。器面調整は内外ともハケ目の上を撫で消すが、部分的にハケ目が残る例も多い。

多式瓦遺跡SD6溝：1、2、4～10、12、14

多式瓦遺跡SD3溝：3、11、13

守岡遺跡13号住居跡：15、17、18、20～24、26、27、31

浜遺跡E-O1第3土器群：16

浜遺跡E-O1第7土器群：19、25、29、32

高添遺跡29号住居跡：30

浜遺跡3号石塔跡1土器群：33、37、45、46、48、54

浜遺跡B-2第4土器群：56

三反田遺跡1号住居跡：34、35、39、41～44、50～53、55

小園遺跡110号住居跡：36、38、40、57、58

板切Ⅱ遺跡7号：63、67、68、77、81、82

板切Ⅱ遺跡14号：59、60、76

板切Ⅱ遺跡17号：73、74、78、83、84

板切Ⅱ遺跡21号：69、70、79

稲田市北遺跡SD-1（B区）溝跡：61、62、64、65、71、72、75

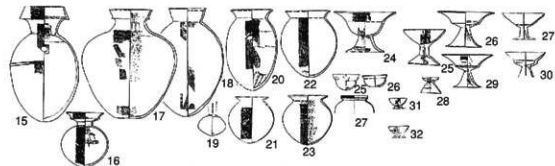
浜遺跡D-O1：66、80

板切Ⅱ遺跡23号住居跡：87～100

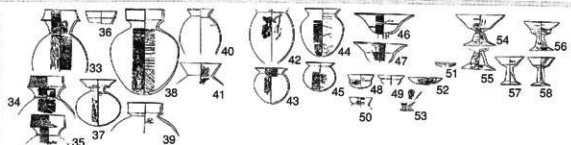
弥生V期(終末)



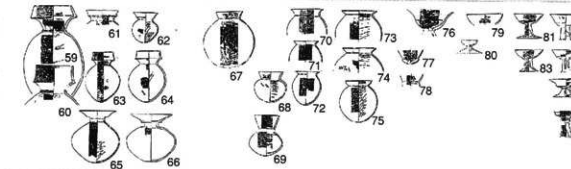
古墳I期(古墳前期)



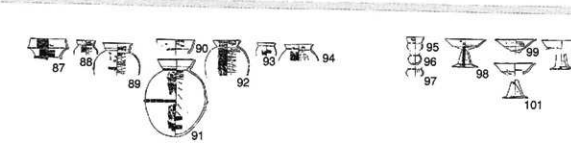
古墳II期(古墳前期中葉)



古墳III期(古墳前期中葉)



古墳IV期(古墳前期終末)



第22図 弥生終末～古墳前期の土器編年(高橋2001から引用)

下瀬遺跡 出土土器編年表

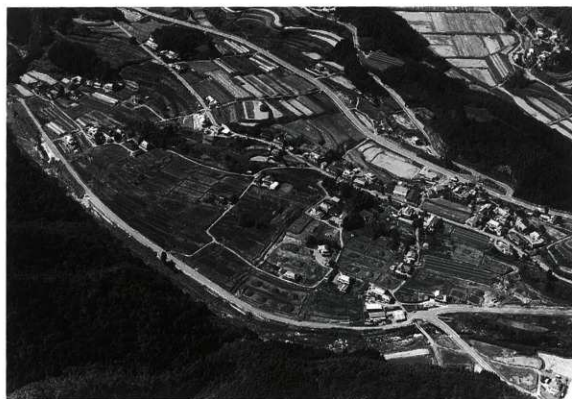
No.	出土層階	器種	形状	体高 (cm)		底径	口径	容量	備考
				最大	最小				
5	下層	石甕	2.0以上	1.5以上	0.25	0.5			貫通?
6	下層	石甕	1.1以上	1.3	0.3	0.2			無蓋蓋面凹形

下瀬遺跡 出土土器編年表

No.	出土層階	器種	形状	体高 (cm)		底径	口径	容量	備考
				最大	最小				
1	5号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
2	5号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
3	21号上層	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
4	5号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
7	1号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
8	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
9	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
10	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
11	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
12	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
13	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
14	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
15	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
16	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
17	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
18	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
19	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
20	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
21	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
22	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
23	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
24	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ
25	3号阶	甕	丸	—	—	—	—	—	石甕、長石、角型、 口：コナナナ、ナナ 底：コナナナ、ナナ 肩：コナナナ、ナナ 体：コナナナ、ナナ

[illegible]

写真図版



下原遺跡遠景（東から）



下原遺跡全景（真上から）



下原遺跡 1号竪穴



下原遺跡 2号竪穴



下原遺跡 3号竪穴



下原遺跡 4、5号竪穴



下原遺跡 4号竪穴遺物出土状況



下原遺跡 4号竪穴遺物出土状況



下原遺跡 4号竪穴遺物出土状況



下原遺跡 4号竪穴遺物出土状況



下原遺跡 6号竪穴



下原遺跡 6号竪穴周辺



下原遺跡 1号土壇



下原遺跡 1号土壇



下原遺跡発掘状況



下原遺跡発掘状況



下原遺跡発掘状況



下原遺跡発掘状況



下原遺跡発掘状況



下原遺跡発掘状況



下原遺跡発掘状況



下原遺跡発掘状況



下原遺跡出土石器 5、6



下原遺跡縄文土器 1



下原遺跡縄文土器 3



下原遺跡 3号竪穴10



下原遺跡 3号竪穴11



下原遺跡 3号竪穴13



下原遺跡 3号竪穴15



下原遺跡 3号竪穴16



下原遺跡 3号壁穴17



下原遺跡 3号壁穴18



下原遺跡 3号壁穴19



下原遺跡 3号壁穴20



下原遺跡 3号壁穴25



下原遺跡 3号壁穴26



下原遺跡 3号壁穴27



下原遺跡 3号壁穴28



下原遺跡 3号壁穴29



下原遺跡 3号壁穴30



下原遺跡 3号壁穴31



下原遺跡 3号壁穴32



下原遺跡 4号壁穴33



下原遺跡 4号壁穴34



下原遺跡 4号壁穴35



下原遺跡 4号壁穴36



下原遺跡 4号竪穴37



下原遺跡 4号竪穴38



下原遺跡 4号竪穴40



下原遺跡 6号竪穴41



下原遺跡44



下原遺跡45



下原遺跡中世土器50 (外面)



下原遺跡中世土器50 (内面)

県営園場整備事業野津原西部地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下原遺跡

2003

発行 野津原町教育委員会

印刷 佐伯印刷株式会社